

## 中日友好医院における訪日受診患者の需要（1/7）

鉄蕉会は、中日友好医院で診療を受けている患者のうち、日本での治療を希望する患者の紹介について、中日友好医院と協議した結果、1科または2科の診療科に絞り込んで訪日受診の患者の需要を調査することとなった。そこで、鉄蕉会が強みを有する乳腺科および中日友好医院と交流実績のあるウロギネ科（ウロUrology泌尿器科、ギネGynecology婦人科）で訪日受診患者の可能性について中日友好医院の医師にヒアリングを実施した。

ヒアリングの実施にあたり、中日友好医院の医師に鉄蕉会の乳腺科、ウロギネ科での治療をより深く理解してもらうため、各科の紹介資料を作成し説明を行った。乳腺科では、内視鏡を併用した小切開手術、乳房再建および非切除凍結療法など、鉄蕉会で行っている乳がんの治療方法を紹介した。また、ウロギネ科では、骨盤臓器脱のLSC(Laparoscopic Sacrocolpopexy；腹腔鏡下膈仙骨固定術)、尿失禁のTVT(Tension-free Vaginal Mesh；骨盤臓器脱メッシュ手術)を紹介した。

図表・52 鉄蕉会乳腺科・ウロギネ科の紹介資料



出所）鉄蕉会作成

## 中日友好医院における訪日受診患者の需要 (2/7)

### (1) 中日友好医院乳腺科

#### ①ヒアリング調査

鉄蕉会は、2015年11月から2016年10月までの間に、**中日友好医院乳腺科の趙医師**1名の研修を受け入れている。趙医師は日本の乳がん早期発見検査、凍結療法を含む治療法を学んでいる。

日本の乳がん治療状況に一定の理解がある中日友好医院の趙医師にヒアリングした結果、**凍結療法と乳房再建については、中国人患者が日本で治療を受ける可能性**が示唆された。乳がんの凍結療法を行うための機器、消耗品は、一部について**国家食品薬品监督管理局（China Food and Drug Administration以下CFDAと表記）の輸入許可**が下りていないものもあり、まだ臨床治療に適する機器が整備されていない。鉄蕉会では乳がんの凍結療法の実績を積み重ねてきており、低侵襲治療を希望する中国人患者からの需要があると考えられる。

図表・ 53 CFDA にて輸入が許可された凍結療法用機器

会社名	本社所在地	機器名		適応部位	CFDA 取得	乳がん凍結の臨床治療使用
IceCure Medical	イスラエル	IceSense3	System、Console	制限なし	2016 年済み	できない
			Probe(針)	-	未取得(臨床実験段階)	
Galil Medical	イスラエル	FPRCH6000	Console	前立腺、腎臓	済み	できない
			Probe(針)		済み	
海杰亚	中国	HYG KB- I HYG KB- II	Console、Probe(針)、 液体窒素保存容器	実体腫瘍	2017 年済み	実用段階ではない

出所：CFDA データベースを基にメディアヴァ作成

## 中日友好医院における訪日受診患者の需要 (3/7)

鉄蕉会の乳腺科は、乳がん治療を中心に、患者の個別の症状と「生活の質」を考慮した治療法を実施している。早期の乳がんの場合、凍結療法など、可能な限り乳房の温存術を行っており、全摘出となる場合でも、乳房再建術により、術後の美しさを維持できるようにしている。

その中で、**特に注目されているのは乳がんの凍結療法である。凍結療法は、がん細胞を凍らせて壊死させる手技で、一般的な切除手術に比べ、体への負担が少なく痛みが少ないのが特長と考えられる**。場合によっては日帰り手術も可能となる。現在、凍結療法は日本の公的医療保険の対象外であるが、亀田メディカルセンターで年間約60件の実績を有している。

また、**凍結療法だけでなく、内視鏡手術や乳房再建手術も検討**することにした。その理由の1つは、凍結療法の適合性である。凍結療法は1.5cm以下の早期がんに対して行うことから、がんの早期発見が大前提だが、中国と日本の間では「早期がん」に対する認識の齟齬が存在する。日本では1.5cm以下のがんを「ステージ0」と判断して治療を開始するが、中国の場合は「ステージ0」をがんとはみなさない傾向にある。現在、中日友好医院で実施している乳がん検査の中で、ステージ2以下のがんは全体の50%を占め、1Aが20～25%を占めているが、がんに対する認識の相違から、早期発見が遅れているということも考えられる。趙医師によると、早期のがん検査が進まない状況では、早期発見も難しく、凍結療法の対象患者は多くない可能性がある。趙医師からは、凍結療法だけではなく、内視鏡手術、乳房再建手術も視野に入れて訪日受診事業を検討してはどうかというアドバイスがあった。乳房再建手術は中国でも日本でも保険適用外である。自国でも高額な負担が発生するのであれば、日本での手術を希望する富裕層患者もいるのではないかと推測できる。

## 中日友好医院における訪日受診患者の需要 (4/7)

図表・ 54 中日友好医院乳腺科趙医師へのヒアリングの様子



出所) 鉄蕉会撮影

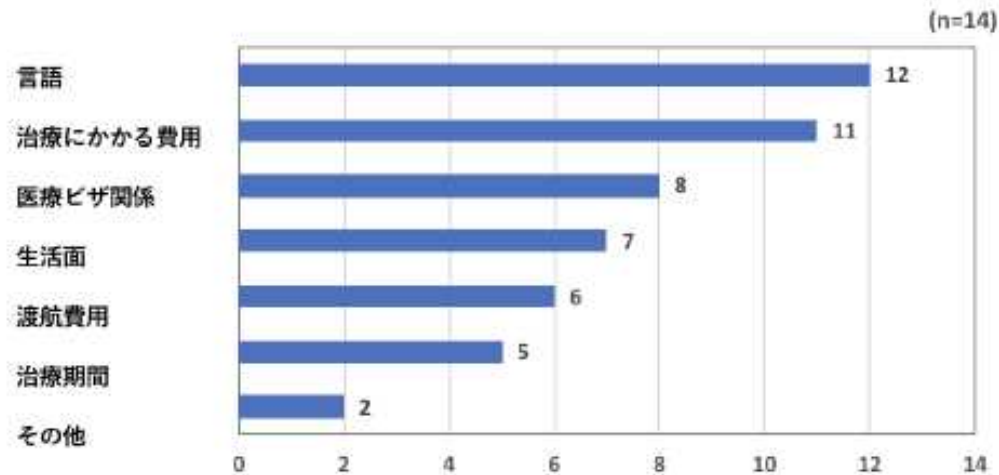


## 中日友好医院における訪日受診患者の需要 (5/7)

### ②アンケート調査

第1回現地調査にて、医師目線で患者が日本で治療するにあたっての懸念点を把握することを目的に、中日友好医院の乳腺科医師を対象にアンケート調査を実施した。**医師が懸念する事項としては、言語、治療費用、医療ビザ、生活面などの費用や周辺環境に関する項目が挙がり、訪日受診で受ける医療サービスへの懸念は低かった。**今後、これらの懸念事項に対して、適切な情報提供ならびにサポートをすることが、訪日受診患者増加の促進には必要であることが示唆された。費用については訪日前に鉄蕉会の専門部署から予め概算を伝達することとし、ビザの取得や必要書類の翻訳サポートなどは中日友好医院から第三者機関を紹介することとした。

図表・ 55 中国からの患者が日本で治療を受けるにあたっての中国人医師の懸念事項（複数回答）



出所：アンケートの結果を基にメディヴァ作成

## 中日友好医院における訪日受診患者の需要 (6/7)

### (2) 中日友好医院ウロギネ科

ウロギネ科は、ウロ（Urology泌尿器科）、ギネ（Gynecology婦人科）の造語で、泌尿器科と産婦人科の境界領域にある病気に関する診療科である。亀田メディカルセンターは、尿失禁、骨盤臓器脱の患者の為の専門治療を提供するため、2007年5月、日本で最も早く本格的なウロギネセンターを開設し、年間約500件の手術実績を有する。2010年5月には鉄蕉会の直腸肛門疾患専門医がウロギネセンター長に着任し、「ウロギネコロジー」のコロ（Colorectal surgery直腸肛門外科）を強化した。ウロギネコロジーセンターについては図表56が示すように、2013年以降手術件数が特に増えている。

図表・ 56 鉄蕉会ウロギネセンター手術件数推移

	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年 1月～6月
TVM	190	242	254	285	206	170	161	131
LSC	0	0	0	91	170	200	192	105
NTR	9	16	6	2	9	4	8	6
TUC/拡張	18	30	25	31	28	31	35	21
TVT/TOT	52	67	68	102	109	94	88	52
合計	269	355	353	511	522	499	484	315

NTR (Native Tissue Repair; 経膈的なメッシュ使用しない骨盤臓器脱修復手術)  
 TUC (transurethral electrocoagulation; 経尿道的電気凝固術)  
 TVT (Tention-free Vaginal Tape; TVT手術)  
 TOT (Transobturator Tape; TOT法)

出所) 鉄蕉会ホームページ

([http://www.kameda.com/ja/general/medi\\_services/operation/index\\_25.html](http://www.kameda.com/ja/general/medi_services/operation/index_25.html))

## 中日友好医院における訪日受診患者の需要（7/7）

ウロギネ科については、鉄蕉会亀田メディカルセンターを数回訪問したことのある**中日友好医院の泌尿器科張医師**にヒアリングした結果、訪日受診の可能性は低いとの見解であった。亀田メディカルセンターのウロギネ科の強みは、「尿漏れ」の治療である。ただし、実施している手術内容の骨盤臓器脱のLSC(Laparoscopic Sacrocolpopexy；腹腔鏡下膈仙骨固定術)や尿失禁のTVT(Tension-free Vaginal Mesh；骨盤臓器脱メッシュ手術)などは、中日友好医院の産婦人科、泌尿器科の2科でケースに応じて分担して実施されている。また、中日友好医院だけでなく、他に女性の「尿漏れ」を診察している医療機関も存在する。**張医師からは、中日友好医院内での症例は基本的に同院または北京市内の医療機関で治療可能であり、あえて日本で治療を受ける必要性を見出すことが出来ず、ウロギネ科における訪日受診者紹介の需要はないという意見があった。**よって、今後、ウロギネ科について、訪日受診促進事業を実施せず、今までと同様に両院間の医師との技術交流、日本での研修を継続していくことで結論づけた。

図表・57 中日友好医院泌尿器科張医師へのヒアリングの様子



出所) 鉄蕉会撮影